

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ (137)

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで見聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

肛門周囲の痒みと痔の関係

第79回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会から(平成28年2月21日)

内痔核(いぼ痔)は初期は自覚症状なし。脱肛があると便汁が漏れ、肛門周囲の皮膚炎の原因になる。浅い裂肛(切れ痔)は病変自体に痒みを伴うことがある。また、裂肛の横には見張りいぼと呼ばれる出っ張りを生じる。痔瘻(穴痔)は初期に膿瘍の存在が痒みの原因になることがあり、さらに瘻孔を通して便汁が流出すると、皮膚炎の原因になる。

「以前から境界領域だとは感じていたが、肛門科医から詳しい話を聞いたのは初めてだった。今後は、痔の鑑別も念頭に置いて、肛門周囲の病変をみることにしよう」。

HbA1cの値に影響を与える薬剤

第79回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会から(平成28年2月21日)

糖尿病の既往のある水疱性類天疱瘡患者の治療で、プレドニンとレクチゾールを併用した。BSが250 mg/dlでコントロール不良であったが、HbA1cは正常範囲内。その後プレドニンを減量し、レクチゾールを中止したところ、HbA1cが上昇した。レクチゾール100～150 mg/日の投与で、80%の患者がHbA1cの偽性低下を示すという。このほかに偽性低下をきたす薬剤には、リパバリン、ヒドロキシウレア、低用量アスピリ

ン、ビタミンE、レトロウイルス感染症治療薬などが知られている。反対に、HbA1cの偽性上昇を示す薬剤には、高用量アスピリン、高用量ビタミンCがある。

「HbA1cの値は赤血球寿命によって修飾されるとは聞いていたが、薬剤が関連することは知らなかった。レクチゾール+プレドニンの処方が行われる可能性がある水疱性類天疱瘡では、HbA1cの評価に注意する必要がある」。

Wolf's post-herpetic isotopic responseって何だ

第79回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会から(平成28年2月21日)

帯状疱疹が治癒した瘢痕部には、好酸球性皮膚症、肉芽腫などさまざまな皮膚病変が生じることがあり、post-herpetic isotopic responseと呼ばれることがある。基礎疾患にリンパ腫や白血病などの血液疾患があることが多い。Köbner現象としての皮膚浸潤とは区別する必要がある。

「Köbner現象と考えてもよさそうだが、変わった反応である。これまで、そういった経験はないが、臨床的におかしいと思ったら、生検をしないとイケないようだ」。

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

抗癌剤のリコール現象は血管外漏出の既往のない患者でも生じる

第79回日本皮膚学会東京・東部支部合同学術大会から (平成28年2月21日)

抗癌剤の血管外漏出の既往のある患者に対して、他の部位からの再投与に伴って、漏出の既往がある部位の炎症が再燃する現象をリコール現象と呼ぶ。明かな血管外漏出の既往がない患者でも同様の現象がみられることがある。臨床症状を起こすまでに至らなかった、微小な漏出があったのではないかと考えた。リコール現象を起こす薬剤にはドキソルビシン、エピルビンシン、ゲムシタビン、ドセタキセル、パクリタキセルなどが知られている。

「点滴漏れがなくても、点滴スピードが速かったり、針刺しに手間どったりすることで、わずかな漏出がおこってしまうらしい。リコール現象という名前ぐらいは覚えておこう」。

プロトピック軟膏と保湿クリームの混和

アトピー性皮膚炎治療研究会第21回シンポジウムから (平成28年2月27日)

プロトピック軟膏は基剤のバリエーションもなく5gのチューブのみで使い勝手が悪く、四肢・体幹などの広い範囲に外用する際には患者のアドヒアランスが低下する。これを改善するために、保湿クリームと混

和し、容器に入れて渡すことで、たっぷり使用でき、患者のアドヒアランスも向上した。混合に不適との意見もあるが、経験上、臨床の現場では問題なく使用でき、効果も保たれていた。刺激症状も減り、経済的な負担も軽減した。

「確かに、5gチューブの軟膏だけで、顔専用という印象が強い。体幹・四肢にも積極的に使用できるような工夫をメーカーも考えるべきだと思った。当院でもこれに習って、顔以外への外用を積極的に行っている」。

胼胝から生じた有棘細胞癌

第17回北里臨床皮膚フォーラムから (平成28年3月3日)

右外踝の胼胝が潰瘍化し、外用薬や被覆材で改善しないという経過。生検で有棘細胞癌であった。下肢の有棘細胞癌は、熱傷瘢痕を基盤とするものが最も多く、外傷瘢痕や慢性放射性皮膚炎なども基盤となるが、慢性の経過の鶏眼・胼胝にも注意が必要である。

「臨床的には、有棘細胞癌とは思えないような小さな潰瘍だった。胼胝に対する治療としての頻回な物理的刺激が原因ということであれば、医原性もあり得るのだろうか。毎日行っている治療行為なので、ちょっと心配になった」。